

# 國學院大學学術情報リポジトリ

## 英文法の迷宮

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 野呂, 健, Noro, Ken メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00000393">https://doi.org/10.57529/00000393</a>

# 英文法の迷宮

野呂 健

## 序

文法は、入るのは容易だが、出口にたどり着かない迷宮である。設計図はあるにはあるのだが、変更、付け足し、削除が相次ぎ、全体像も個別部分も判然としない奇妙な建物になっている。いや、建物というよりも常時変化し続ける奇怪な生き物、鶴（ぬえ）のようなものか。鶴は、頭は猿、体は狸、尾は蛇、脚は虎に似ていたそう。文法に相当する骨格や神経組織はどうなっていたのであろうか。ダンテの『神曲』では地獄・煉獄で苦しむのは罪を犯した人々だが、文法の迷宮で苦しむのは真面目な善人である。

たいていの人は、中学で足を踏み入れた英文法の迷宮の中を手探りでさ迷い歩いている。言語に深くかかわればかかわるほど、それだけ余計に謎が深まることはほとんどの人が経験していると思うが、英語のように世界で広く使用されている言語であっても状況は変わらない。英語には変異種が無数にあり、想像を超えた柔軟で自由奔放な、時には奇怪な、使われ方をしている。しかしその根底のソフトウェアを理解するための手がかりはいまだ深い闇の中だ。文法は言語のソフトウェアだが、バグが多い。

言語は自ら一定の方向に向かって変化する。この現象はドリフト (drift「駆流」) と称されることがある (Sapir 1921: 147-169)。英語の場合、文法では、水平化 (levelling) と呼ばれる簡素化、語順の固定化、少なからぬ機能語を生み出した文法化 (grammaticalization) が三大ドリフトである。水平化という無変化傾向への進展の度合いを見ると、英語は自らクリオール化しているときえ思われる。しかしながらどの部分が廃れどの部分が台頭し、どこが入れ替わるか、またどのタイミングによるか、きっかけは何かについては不明な部分が多い。有標の表現が無標に変わる過程の解明に、各種の謎を解く鍵がある。

本論考では、第1章において、外国人英語話者として一見すると不可解と思われるが、適切な知識があれば説明可能な事項を取り上げる。第2章では、あまり

にも不可解な、be動詞の否定命令文中の don't の使用について多角的に議論する。迷宮も適切なるガイドがあれば抜け出せる可能性があることを示せればと思う。

## 第1章

英語は客観的な意味で論理的でもなければ明確でもない。日本語は非論理的であいまいだとよく言われるが、それはいわれのない中傷である。むしろ英語の方が不可解な矛盾に満ちている。<sup>(1)</sup> たとえば(1)を見てみよう。

- (1) a. I have a wife (of my own) / \*the wife / \*my wife. (私には妻がいます。  
 b. He is meeting a woman. (彼浮気しているよ。  
 c. I cut a finger / my finger yesterday. (昨日、指切った。)

不定冠詞 a (an) は、数詞の one から弱音化により派生したが、名称が示すとおり、通常は不定なもの、実態・本質がその時点では聞き手が認識できていない新情報の標識である。<sup>(2)</sup> しかし(1)aは誰がどう考えても話者である I の妻、つまり特定の「定的な」情報を示しているのに、不定冠詞 a が使用されている。意味は定定的なので of my own をつけても適格である。不思議なことに定定的なものを示す the や my は不適格である。不定性によって、一般的に妻の座にある誰の妻でもよかったらいささか問題だ。逆に(1)bでは、a woman は妻以外の女性の解釈を受ける。こちらは単なる文法というよりは情報伝達の際の含意が問題なのだが、本人の妻だったらわざわざ woman という必要性はなく、ただ wife といえはずむことである。それなのに、wife を使わずに woman を使ったのには何か言外にほのめかすところがあったから、と推論が働く。つまり、この a woman は「奥方ではない女性の誰か」ということになる。だから「浮気」と訳した。(この点は日本語でも同じである。)[不定冠詞+名詞]の構造は同じであるのにこの違いは不可解だ。(1)cは両方の表現が可能だが(1)aと同様、自分の指を切ったのだ。不定冠詞だからといって、だれの指でもいいとはならない。いずれも分離不可能性 (inalienability) という概念で説明されることがある現象である。

否定疑問文に対する応答の様式が日本語などと異なるのもよく知られている。(2)を見てみよう。

- (2) a. Didn't you hand in the final draft? (最終稿提出しなかったの?)  
 b. Yes, I did. (いや、出したよ。(lit.) No. I handed in the paper. / ?? うん、出したよ。)  
 c. No, I didn't. (うん、出さなかった。(lit.) Yes. I didn't hand in the paper. / ?? いや、出さなかった。)

- cf. a. Do you mind taking our picture? (写真撮ってもらえますか。)  
 b. No, I don't mind. / Of course. / Yes. (ああ、いいよ。)

英語は疑問文の様式にかかわらず、答えとしては事実を述べればよい。一方日本語では、「あなたの言っていることとは逆です。」「あなたの言っている通りです。」のように、疑問文の様式に沿った返答をするのが原則である。世界中のいろいろな言語ではどちらの応答様式をとるかはばらばらである。ただ日本語でも、現実には??で示した言い方がなされる場合も少なくないし、cf. で示した応答についても、その場の語用論上の要請で All right、OK、No problem、Of course. に対応する Yes. が返ってくることも現実には稀ではない。特に英語の非母語話者の場合はそうであるともいえるし、逆に英語母語話者が非母語話者に対して、否定形式で答えたらわかりにくいだろうと忖度して、結論としての行為を端的に示す Yes. に該当する表現を使用することもある。英語では、応答の言語形式にかかわらず、事実としての自己の行動を表現しさえすればよい。

Pope (1976) *Questions and Answers in English* を援用したカチュラとスミス (2013: 141) によると、言語には2種類の「質疑—応答」体系が存在する。一つは「肯定—否定 (positive-negative)」体系、もう一つは「賛成—不賛成 (agreement-disagreement)」体系と呼ばれる。英語は前者、日本語は後者のタイプを使用する。従って、英語母語話者の多くは「賛成—不賛成」タイプの話者と会話するとき、yes, no の解釈に戸惑いが生じる。逆もまたしかりである。南アジアからシンガポール、マレーシアあたりでは、英語を話しているながら、応答のボタンが異なっていて、解釈に確信を得にくい。

(3)はどうだろうか。in でも out でも意味は同じである。全く逆の意味を持つ前置詞のどちらを使っても意味が同じとは、論文らしからぬ表現をすれば、「マジやっつられない」。本来は in だが、ドイツ語の ausfüllen の aus (実際には分離動詞なので Ich fülle aus- となり aus は切り離される要素である) に対応する out がアメリカのペンシルヴァニア州あたりで英語に導入されたといわれている。いわゆる Pennsylvania German である。これは外国語の影響というカテゴリーに入る。

### (3) Fill in / out the form and send it to the office.

アメリカ英語の拡大とともに、fill out が世界中に広まったのが現状である。

さて、さらに悩ましいのは、(4)の2つの文が同義であるということだ。一方には否定辞 not が含まれ、他方には含まれていないのに、同じ意味(アイルランドに住めなくて寂しい)だから実にややこしい。(5)も類例である。

- (4) a. I really miss living in Ireland.  
 b. I really miss not living in Ireland.
- (5) a. We doubted that we would be rescued.  
 b. We doubted that we wouldn't be rescued.

これは、暗号解読 (cryptanalysis) みたいなものだが、miss、doubt、denyなどの動詞に暗黙裡に含まれている「否定の意味」がnotによって顕在化することがあると考えるほかはない。従って二重否定にはならない。このnotは論理的には不要な虚辞の一種である。表層上のnotの有無が意味解釈に影響しないのはあまりにも不可解だ。しかしこの用法は古くからあり、荒木・水鳥・米倉 (1997: 72) によれば、(6)の例がChaucerにある。

- (6) This is to seyn, that nature deffendeth and forbedeth by right that no man make hymself riche unto the harm of another persone. (This is to say, nature prohibits and forbids by right that any man make himself rich.)

(Chaucer *The Tale of Melibee* 1784; イタリアック体は筆者による)

「否定」の意味が潜在的に含まれている動詞の否定の部分が時に顕在化するということだが、認知のしかたの微妙な違いが言語形式に反映された例とも考えられる。

おそらく誰でも知っていることだが、youが単複同形であるのも非常に不便で理解しがたい。そのため、古い英語や方言に残る thou /thee 対 ye/you の区別を根ざす形態上の区別を維持したり、あるいは英語の各種の表現を駆使して区別しようとしている。

Trudgill (1999: 92) によれば、アイルランドのいくつかの地域では、'How are you?' を単数に、'How are youse?' を複数人に対して使用している。対面のコミュニケーションにおいて、相手が一人か二人以上かは重要な問題なのだ。You be quiet! や You stand up! で周囲に聞き手が複数いたら戸惑いが生じる。Watch yourself! と Watch yourselves! なら数の識別が可能なので問題は生じない。目的語再帰代名詞は、主語と数・人称が一致するからである。また、OE期には両数が生きていたので、1人称はpu, git, geの3分割となり、2人称の主語が暗黙裏に認識される命令文においても、たとえばBind. (一人の相手に「あなた東ねなさい」とBindath. («あなた方東ねなさい」) のように形態上の区別がなされていた。簡素化への流れは想像以上に強い。

従って、現代英語において日常会話で頻出するyouの数を標準英語で区別しなくなった点は理解に苦しむ。そのため複数であることを明示するために、you

guys, you all, y'all, yins, yous, youse, yowz, youse fellows, you togetherなどが各地で使用されてきているのも当然といえば当然である。なお、この種の語の分布は、歴史的な展開に根ざす伝統的な方言と移民等の移動による方言の水平移動の両方が関わっていることを忘れてはならない。例えば、概略、ロンドンを中心とした南東部では単数形はyou, 南西部ではthee, 北部はthou, スコットランドとの境界ではyeが伝統的方言として記録されている(Trudgill 1999: 93, Map; Upton & Widdowson 1990: 66-67)。アメリカでは、複数形に関して、y'll(南部)とyou guys(北部)とに大きくわかれ、ピッツバーグを中心とした狭い地域にyinsがみられるという(Katz 2016: 27-31)。

なぜ複数形のye / youが優勢になってthou / theeを駆逐してしまったのかには、敬意・丁寧表現がかかわっているという説が有力である。宇賀治(2000)、荒木・水鳥・米倉(1997: 52)その他によれば、古い時代に君主が自分を指すときに複数形が使用された。<sup>(3)</sup> そうすると、臣下が君主や貴人を呼ぶときには複数形を使用することが逆の意味で自然になる。<sup>(4)</sup> この敬意の複数のyeは13世紀後半からChaucerあたりまでは散発的であったが、その後頻度が高まった。13世紀ころからフランス語のvous-tuの使い分けの影響で、yeが目上に対する敬語として単数形の代わりに用いられようになった。thou / theeはもっぱら家族、子供、目下などに対して使われるようになったが、礼を欠くとも捉えられて次第にすたれた。ye / youはのちに特別な敬意の意識なしに一般化して広く用いられるようになったが、16から17世紀にかけて主格yeと目的格youの形態上の混同が生じて結果的にyouを単数・複数、主格・目的格のすべてに用いるようになって現代に至っている。2人称youの件は言語のみならず社会的要因の歴史的展開によって説明が可能である。

3人称単数現在でもcan, may, must等の助動詞には-sがつかない(半助動詞とも言われるdoはdoesに、haveはhasになる。)、あるいはmustには過去形がない。can, may, mustなどの法助動詞の場合、3単現の-sがつかない理由、そして不定詞形、現在分詞形、過去分詞形がないのは、おおもと過去現在動詞(preterite-present verb)という不思議な起源を持つ語からきているからである。そもそも過去形だから3単現の-sはつきようがないし、原形から作る不定詞や分詞をそこから作ることはできない。過去現在動詞とは、もともと強変化動詞の過去形(意味の点からすれば完了形)だったものが現在形として使われるようになり、結果的に元の現在形が失われ、新現在形(直説法現在複数形)をもとに新しい過去形が作り出された動詞グループである。mustが時制の一致の法則に従わず、had toとせずにそのまま用いられることがあるのは、そもそも過去形であることにも理由がある。現代英語の助動詞はほとんどこの起源をもつ。

goの過去形にg-が出現せずwentであるのも不思議だ。(英語母語話者の幼児は結構\*goedを使用するが過剰修正といわれる。しかしある種の自然さ、合理性

は見られる。実際、英国北部方言ではgoedが使用された時期がある。) gan (>go)の過去形は1人称の場合別語根のēode / ēodenであったが、MEではyede / yodaに発達した。つまりganは過去形を持たない変則的な動詞で、別の動詞の過去形があてがわれたわけだ。このようなやり方を補充法(suppletion)というが、ēode / ēodenはなぜか16世紀半ばには廃れてしまった。そのためgoと類似した意味を持つ弱変化動詞wenden (=turn)の過去形wentを使用するようになり、最終的に go-went-gone-goingの屈折が確立した。ちなみに補充法は他の分野にも見られる。不規則な比較変化(good, better, best; evil (bad), worse, worstなど)はその例である。補充法などあまりにご都合主義ではないか。

go同様be動詞の活用もあまりにも変則的で理解しがたい。be動詞(OEではbēon)がスプリングからすると異質のものを組み合わせた奇妙な体系を示すのは、ゲルマン祖語の3つの語根 \*bheu-, \*es-, \*wes-のいずれかを起源とした3系列の屈折を合体して作り上げられたからである。<sup>5)</sup> 紆余曲折を経て、\*bheu-は現代英語のbe, being, beenに、\*es-はam, are, isに、\*wes-はwas, wereにつながった。これも補充法であるが、なぜそのようなことが行われたのかは詳らかでない。

ここまであげた諸例は、歴史的変化の知識、あるいは他の言語の知識があればそれなりに説明が可能なものである。言語変化の偶然性、必然性、そして変化の複雑性と不均衡性に留意することが重要である。なお、使用頻度の高いものほど不規則な傾向があることにも注意が必要である。beやgoはその典型といえる。

名詞の可算・不可算の問題も厄介だ。要は、モノ(object)や事態(event)をどのように捉えるかという認知の様式はさほど変わらないのだが、言語記号化の段階で様々な様式を利用するために、慣れないと「不可解」と感じられ、違和感が拭い去れない。言語外の事物、事象の言語記号を通した捉え方は、通時的に形成されてきた「脳の独特のふるまい方のパタン(くせ)」に起因するので、払拭するのは難しい。

一例をあげるならば、東アジアや南アジアの英語ではfurnitureは普通に可算名詞として使用され、複数形はfurnituresとなる。英文法上は誤りであり、試験であれば×になるが、人間の脳の営みからすれば、椅子やテーブルなどたいていの家具は視覚的にも個別的に捉えるのが可能であるのだから可算名詞の扱いのほうがよほど自然である。また、O.E.D.にはinformationの複数形の用例(17-18世紀)があげられている。18世紀半ばには廃れたようだが、現代英語のどこかで生きていても、生きかえっても不思議はない。

chickenやeggのように状態によって可算・不可算の両方の使い方がある単語も厄介ではあるが、目に見えるという点ではさほど苦労しない。watersも水が広範囲に広がっていれば複数形の表示でもなんとなく了解してしまう。文法上は強意複数(intensive plural)という。

英語母語話者においても可算・不可算の判断は一枚岩ではなく、バリエーショ

ンがかなりある。Trudgill & Hannah (1994: 73) によれば、lettuce はアメリカ英語では不可算の質量名詞の使い方のみなので、I like lettuce, a head of lettuce, two heads of lettuce となるが、イギリス英語では、質量名詞としての I like lettuce. は共通だが、a lettuce, two lettuces の可算名詞としての扱いにもなる。celery にはどちらにも不可算の用法しかない。sport はアメリカ英語では可算のみなので、John is good at sports. だが、イギリス英語では質量名詞扱いもあるため John is good at sport. で問題ない。非母語話者としては困惑だけが残る。

最大のポイントは、可算名詞は有界性からくる形状の認識が決定要素になり、不可算名詞は非有界性による素材・物質の恒常性が決定要素になる。後者は形状が変わっても素材自体は変化しない。まさしく水は方円の器に従うのだ。I ate chicken. は「鶏肉を食べた」、I ate a chicken. は「鳥を丸々一羽食べた」であるし、You had an egg, didn't you? は「玉子(1個)食べたのね」だし、You have egg on your sleeve. は「袖に卵のかすがついてるよ」というわけだ。冠詞の有無が識別に役だっている。不可算名詞を「数えなければ」、「形」や「器」によって境界を設定しなければならないから、a glass of, a piece of, an item of などとなるのだ。こう考えると少し体系が見えてくる。

従来の文法書では、例と説明の量は別として可算名詞にはこれこれがあり、不可算名詞にはこれこれがあると説明され、お決まりのように例外の説明が続く。どうも典型的な例の部分集合から説明を開始するのがよくないと思われる。むしろ、多くの名詞は本来「可算名詞としての用法と不可算名詞としての用法の両方を持ちうるが、使われる頻度と微細な意味の可変性により、用法の偏りが顕著になった」と考えるほうが無理がない。

## 第2章

さらなる迷宮は、be 動詞の否定命令文における don't の使用である。まず否定命令文のパラダイムを示そう。Larsen-Freeman & Celce-Murucia (2016: 233, 236) 並びに Huddleston Pullum (2002: 802-803) から部分的にアイデアを借用した以下の例の検討から始める。

- (7) a. Be quiet.  
 b. Do be quiet.  
 c. Don't be a fool / sorry.  
 d. Never be a fool.  
 e. \*?Be not a fool.  
 f. \*Not be a fool.
- (8) a. Don't you give up.

- b. Don't give up.
  - c. Do not give up.
  - d. \*Do not you give up.
  - e. \*Do you not give up.
- (9) a. Don't everyone shout us.  
 b. Don't have eaten all the pizza by the time I get back.
- (10) a. Let's not go. (一般的用法)  
 b. Let's don't go. (アメリカ英語用法)  
 c. Don't let's go. (イギリス英語用法)
- (11) \*Must / \*May / \*Can / \*Will study hard.

現代英語では、be動詞は助動詞と同じく直後にnotを置くことで否定する。その点からすれば、Be not a coward. が適格形であるし、不定詞を打ち消すにはその直前にnotを置くことからすれば、Not be a fool. が適格形になってしまう。一般動詞の否定には(現代英語では)助動詞doを用いる。余計な語が加わるので、「迂言のdo」(periphrastic *do*)と呼ばれる。この二つの否定の様式が混在することは本来あってはならない。しかしながら(7)cにおいてはそのタブーが犯され、be動詞がdon'tによって否定されている。(7)bのdoは強調の用法と考える。(7)e, fは現代英語では(原則)不可である。また、否定の意味をもつ頻度の副詞が文頭にある(7)dは適格なのに、同じような否定の意味を持ちながら(7)fは不可である。(8)を見ればわかるとおり、主語が顕現すると、aは可能なのに、c, dは不可となる。主語がある場合には、少なくとも口語では縮約形を用いなければならない。(9)aでは主語が3人称なのにDoesn'tではなく、Don'tが用いられているが、everyoneであっても、語用論上はeveryone *of you*ととらえることで説明はつく(Huddleston-Pullum 2002: 802)。(9)bではdon'tと完了のhaveが結合しているが許されている。さらに、(10)a, b, cが示すとおり、let'sの否定は3つの様式が併存している。(10)aはもっとも普通の用法だが、よく見れば、古い非迂言的否定法である。キルヒナー(1983: 446)によれば、このdon'tはただのnotに等しいという。そのように解釈すれば確かに、(10)bは(10)aと同じことになる。同書にはlet's don't be seriousの例があがっている。歴史のどこかでもつれた糸がそのまま残っているような可能性がある。(7)c、(9)b、(10)b、cを見ると、命令文に関する限り、don'tに思うほど強力な使用制限はかかっているように思われる。

ここで現代英語における否定命令文の特徴をとりまとめ若干のコメントをつける。

- ① 主語の有無、その他の統語上の条件にかかわらず、否定命令文はdon'tを

文頭に置く。縮約形でない do not の場合には若干の制約が伴う。

- ② 助動詞としての be, have があっても、助動詞 do が重ねて必要である。ただし、法助動詞は不可である。
- ③ 助動詞 do は命令文には出現するが、対応する平叙文には出現しない。Don't be a fool. と You aren't a fool. を比較すれば一目瞭然である。しかしながら、Alexander (1988: 188) によれば、Be careful, or you'll break that vase! を if によってパラフレーズすると、If you're not careful, ~ ほど普通ではないものの、If you don't be careful, ~ が出現するという。'be careful' を否定するのだから 'don't be careful'、さらに時制付きの if 節だから主語が必要で you の挿入となる。don't が動詞のカテゴリーの枠を超えて、単なる否定のマーカートして機能している可能性をうかがわせる。キルヒナー (1983: 446) にも同趣旨の指摘がある。
- ④ 命令文の主語は肯定形の動詞に先行するが、否定文においては通常 don't の後に続く。前に主語が出る You don't~, の形式では、否定平叙文との区別が難しい。この種の語順変更は他の種類の節の否定では見られない。
- ⑤ 補語が名詞、つまり「(Don't) be + 名詞」の場合、否定文のほうが肯定形よりも使用頻度が高い。Alexander (1988: 188) によれば、内容は Don't be an ass / a fool / a silly idiot. のようにほぼ愚行関連に限られる。さらには、Be a monster, granddad. のように「ふり」をする場合にもよく使用される。使用領域に偏りがあるということだ。一方肯定形の「Be+ 名詞」は、Be a man, Be a devil, Be an angel and fetch me a glass of beer. あるいは、Be yourself. のようにほぼ固定したイディオムの表現が多い。高橋 (2017: 18-19) によれば、そもそも命令文に好まれる一群の動詞があり、自己制御可能という意味特性を持つ。同書 (29-30) によれば、否定命令文に最も多く出現する動詞は、worry, mind, bother であるが、一部の形容詞 (angry, ridiculous, rude, etc.)、名詞 (jerk, cynic, etc.) も否定命令文で使用されることが多い。いずれも望ましくない状況を示す語であり、それを「否定」によって望ましい方向に変える意図が根底にある。構文と語彙には適合性が求められる。

繰り返しになるが、迂言の do による疑問文・否定文形成は一般動詞に限られ、(7)c の形式は破格である。\*She does not be a dentist. \*Does she be a dentist? はいずれも容認されず、Don't be a fool. (もしくは Never be a fool.) の形式のみが適格とされる。文法書、語法書のいずれも、「be 動詞の否定文には don't を使用するという」事実のみの記述があり、「なぜ」の説明はない。Jespersen (1940: Part V, 511) では「古くは be not の形式が普通であったが、現代英語では don't を用いる」とそっけなく説明され、Quirk et al. (1985: 134, 833) では、「この

don't はbeに対してdoを適用する特異な例であり、一種の標識として機能している」との指摘はあるが、理由については言及がない。言語に関する「なぜ」は問うてはいけないのであろうか。

英語史関係の本では、時間軸に沿った解説が与えられているが、やはり、理由の解明には至っていない。例えば、荒木・宇賀治 (1984: 431) では、(12)のようになっている。

(12) 命令文は他のどの種類の文にも先駆けて be と do の共起を許容した。肯定文では18世紀中頃から、否定文では16世紀末から用例がみられる。

Molly, *do you be faithful to your friends.* (1749 Fielding, *Tom Jones*)  
[Jespersen] / Good Hermia, *do not be so bitter with me.* (1595-6 MND, III. Iii. 306)

さて、do全般に関する問題は、いきなりの解決は困難と思われるので、解決の鍵になりそうな部分を一つ一つ確認していく。

第一のポイントは、be, have, doの3語がどのような経緯で選択されて(半)助動詞の用法が発達してきたのかである。いずれも基本語中の基本語であるが、文法化でいう意味の漂白化が容易な語でもある。「アル」(存在)、「モツ」(所有)、「スル」(行為)に伴う意味の基本性と意味領域の相補性が関わっているだろう。フランス語をはじめとするヨーロッパの言語もbeとhaveに相当する語を半助動詞として使用している。この3語が語彙的用法と文法化を経た文法的用法の二面性を持つことになったのが大きな分岐点である。

第二のポイントは、上記3語の助動詞としての機能分化の理解になろう。be動詞は受動態と進行相の表現に、haveは完了相の表現に、そしてdoは一般動詞の疑問・否定の文法操作に関与していくことになった。beは状態を示す語だからから-edや-ingと結びついて受動や進行状態を示すのにはさほど違和感はない。haveも完了した結果や状態を「持つ」と考えれば、まあ、納得の範囲内である。doだけが理解を拒んでいる。

第三のポイントは、迂言的doの16世紀末から17世紀における急激な使用の拡大、特に、否定文、疑問文における使用域の拡大の結果、本来組み合わせ的にはあってはならないbe動詞の否定命令文にまで広がった実態と理由の解明である。これは利便性によるものか、体系に一貫性 (cf. Sweet 1971: 87-88) を持たせようとしたことの余波なのか、類推・誘因・錯覚によるものなのか、見極めが必要である。文法形式上の説明が困難な場合には、認知的・社会的要因にまで視野を広げる必要がある。たとえば、人間は楽をしたい生き物で、最小の認知努力によって、最大の情報獲得・提供をしようとする習性があるといった視点である。

第四のポイントは迂言的doの起源の問題である。古英語・中英語の地域方言

と *do* が多義であることの両方が関わる問題だが、どの意味・用法から迂言の *do* が発達したか確定することができれば纏れた糸を少しほぐすことができる。方言やケルト語の影響も視野に入れることになる。

本論に最も関係が深いのは、迂言的 *do* の起源である。迂言的 *do* の起源については諸説あるが、小野 (1960)、Fischer (1992: 394)、安藤 (2007: 185-6)、Mustanoja (2016: 602-608)、ブルナー (1973) などを借りて概略を示す。①～③はいずれも *do* の多義性に関わっている。

- ① 使役の *do* (causative *do*) 起源説：原義の一つに「引き起こす、させる」があるのだが、原形不定詞を伴う形が「助動詞＋原形不定詞」と同じであることに強みがある。③とも関わるが、ラテン語 *facio*、古フランス語 *faire* との類似性も見られる。寺澤・川崎 (編) (1993: 108) によれば、使役の *do* は1500年直後に消滅し、純粹迂言的 *do* が入れ替わりの様相を示しているが、これも根拠の一つになる。前者の衰退と後者の隆盛が軌を一にしているように見えるからである。ただし、どちらが引き金になっていたのかは定かではない。Nevalainen (2012: 245-256) によると、コーパス資料から15世紀前半には使役構造は主として宮廷において多用されたが、1500年以降は非常にまれとなっている。宮廷の主要な人々の言語使用の様態が変化して、バタフライ効果のように広がった可能性は否定できない。
- ② 代動詞の *do* (vicarious *do*) 起源説：虚辞であるという以外に迂言の *do* と代用がどのようにかわるか不明であるのと、原形不定詞についての説明ができにくいという欠点がある。そもそも迂言に関わる余剰性が説明できない。
- ③ 強調の *do* (emphatic *do*) 起源説：肯定平叙文における *do* の使用の例にはなる。余剰性には関わるが、助動詞への飛躍の説明が難しい。
- ④ 他言語の影響説：①ともかわるが、中ラテン語 *facere*、古フランス語の *faire* との類似性、さらには、古・中ドイツ語の *tu on*、中オランダ語 *doen*、ケルト語 (現代 Welsh に 'do' を意味する動詞の迂言的用法があるという) の影響が提起されているが、言語接触の点でフランス語以外はやや弱い。不定詞が後続する OF *faire* はしばしば使役の意味を失い、迂言的助動詞になることが知られている。ケルト語 (ウェールズ語) の場合、ブリテン島西部に追いやられた敗者のマイノリティ言語であり、早い時期にイングランドに併合されたので、英語の根本的性格を変えるほどの言語上の影響は考えにくい。系統的な親和性により、北欧の言語が3人称の代名詞を英語に与えたのとは次元が異なる。ただし、なぜこのような指摘が生じたか理解できる部分もある。一つは Welsh そのもの、もう一つは Welsh English の用法である。水谷 (1955: 11, 23, 44, 45など) によると、「私はチー

ズを食べません」は Welsh では *Dydwi i ddim yn bwyta caws.* となる。否定文を作る際には、文頭に否定を表す動詞前虚辞 *D-* を置く、*ydw* は *bod* の変化形、*i* は「私」、*ddim* は否定辞。動詞前虚辞は、文法機能のマーカースとして機能している：疑問文の場合にはゼロ、肯定文の場合には *R-*、否定文の場合には *D-*、つまり、それぞれ *Ydychi...*、*Rydychi...*、*Dydychi...* となる。口語の場合、*D-* には強勢が置かれそうだが、否定文の動詞前虚辞が *do* の迂言的用法と類似しているとするなら影響といえるかもしれない。一方、Welsh English や英国南東部方言では強勢のない *do* が過去の習慣的行為 (*habitual action*) を表すために使用されている。I used to go to the pub every day. が I did go to the pub every day. となるわけだ。肯定文中の迂言の *do* の使用はあまり違和感を生じないのかもしれない。

- ⑤ 言語外の要因、つまり、社会言語学的、心理言語学的、認知的な要因を重要視する説：Fisher (1992: 394) の脚注で述べられていることだが、形態上、文法上整然たる説明ができないのは、言語変化に及ぼすヒューマンな要因、錯覚、誤謬、類推、誘因、一貫性構築、使い勝手の良さ、といった偶然的重なりが考えられるからである。ブルナー (1977: 683) によれば、18世紀の文語の合理化傾向に見られる、一般にいっそう簡単な、語順の変更などを伴わない表現法への努力が寄与した可能性がある。当時も今も普通の人々は文法書など読まない。さらに、小野 (1966: 67) によれば、*do* が散文に用いられるようになったのは、15世紀末で、当時 *do* は教育のある人々に好まれたらしい。この表現方法は、当時の分析的表現への傾向と重なっていたともいえる。

*be* 動詞の否定命令文に *do* を用いることは、命令文及び否定文の様式（特に語順）の史的展開、*do* の用法の拡大と拡散の二つの事象の関数としてとらえねばならない。主として Ellegård (1953) *The Auxiliary 'Do': The Establishment and Regulation of its Use in English* に基づく記述である荒木・宇賀治 (1984: 427-429) によると、迂言的 *do* は OE のころから使用されていたが、16世紀に急速に普及し、17世紀末に現在の英語の用法が確立した。ただし、強調用法と迂言的用法の区別は強勢による以外ないため、かなりの困難を伴う。本論にかかわる部分のみを抽出すると、特徴として、

- ① *do* は肯定平叙文より否定平叙文、疑問文で高い頻度を示す。(肯定平叙文では敬遠されるのは、機能がはっきりしないからであろう。強調なのか、それとも何らかのマーカースであるのか判然としない。法助動詞にみられる心的態度に結びつく固有の意味が *do* には欠如していて文法操作のみが関わっている。文法操作における有標性を示す機能が焦点である。)

- ② doは否定平叙文よりも疑問文で高い頻度を示し疑問文中では否定形で頻度が高い。全文種中で否定疑問が最高頻度を示す。(否定・疑問との強い結合が顕著である。)
- ③ 肯定平叙文のdoは16世紀半ば以後衰退する。(そもそも余剰的であるから、不要なものとして衰退は当然である。法助動詞とは性格が異なる。)
- ④ 否定命令文ではdoは16世紀後半まで頻度は低いが、以後急伸する。否定平叙文、否定疑問文、肯定疑問文でも同じ傾向が顕著である。(時代背景として、1476年にCaxtonがロンドンに印刷術を導入し、ロンドンの標準英語が急速に普及したこと、1489年以降は法令等公文書がすべて英語で書かれるようになったこと、屈折語尾の消失が著しく進んだこと等が指摘できる。)

否定命令文における使用が、16世紀半ば以降急激に増加する点が興味を引く。時代背景として特徴的なことは④で言及したが、さらに非人称構文が廃れたこと、関係代名詞でthatの代わりにwhoが用いられるようになったことなど、言語上大きな変革の時期である。肯定平叙文でなぜ意味に寄与しないdoが用いられたかに関しては、can, may mustなどの他の助動詞と同じ横並びにするためなどの理由が考えられるが、意味があまりにも広く無色ともいえるから、結果的に文法上の操作に関わる部分だけが生き残ったともいえるかもしれない。

否定辞のありようについてまとめておくことは無駄ではあるまい。Blake (2002: 206-211) によると、まず、否定の一般的性質として、あらゆる言語において否定辞 (negator) を節 (文) 頭近くに置く傾向がある。否定辞はほとんど強勢を伴わないので弱まり、強める語が付加される。フランス語の場合 *ne~pas* となる。この要素が付加されると、もとの否定辞は弱強勢のためと追加された語によって否定であることが十分に示されるため、否定の標識機能を果たす必要がなくなり、結果的に消失する。すると、第2要素は次第に節中を前進して、消えた語が占めていた節頭を占めるようになる。弱化と再強化のサイクルが繰り返される。このサイクル説はJespersen (1930=1917: 4) の冒頭部の説明と重なっている。OEでも状況は同じで、主要な否定辞は動詞の前に置かれる *ne* であったが、*naht / noht (>not)* などの挿入によって強化された。MEころまでには、このプロセスにより、「主語 + *ne* + 動詞 + 否定辞」(例: *I ne seye not*) のような文が形成されたが、その後 *ne* の消失により「主語 + 動詞 + 否定辞」(例: *I seye not*) が生じた。発達の過程は概略(13)のようになる。

- (13) (i) *ic ne secge.*  
 (ii) *I ne seye not.* (notの付加)  
 (iii) *I say not.* (neの消滅)

<I not say.> (doを用いない点で(iii)寄り、本動詞の前にnotを置く点で(iv)寄りの語法)

(iv) I do not say. (doの挿入)

(v) I don't say. (縮約形の発達)

否定辞が複数ある場合も多いので、多重否定はごく普通の現象であり、数理的に「否定+否定」が肯定になるという見解は18世紀の時代思潮並びにラテン語の文法の影響によるものであるが、この段階では無視してよい。

言語上の事実や、統計的な傾向についてはかなりよくわかっているが、「なぜ」に関わる動機付けの問題が残っている。古い研究だが、Sweet (1898=1971)は無視できない見解を示している。同書(90-91)によると、疑問文における迂言のdoの使用は、疑いなく古くからある「動詞の倒置(verb-inversion)」の不便さを回避したい欲求によって引き起こされた。特に、動詞が目的語と離れること(see you it?)と、主語が目的語の位置に来てしまう(catch dogs mice?)2つの事態を避けることができることが重要である。他動詞とその目的語を切り離すことは現代英語では絶対的なタブーである。youとitの場合、主格と目的格が同形という事情もある。Hudson (1996: 10)も同様の見解を示し、主語と目的語の区別が容易になるとしている。目的語の件は自動詞については当てはまらないので、迂言のdoはまず他動詞に適用され、ついで自動詞にも広まった推定できる。迂言のdoを使うとDo you see it? Do dogs catch mice?となる。このことが、doが広く使われるようになった動機であることは、肯定文と同じ語順をもつ疑問文においてはdoが使われないことから頷ける。Who broke that window? (\*Who did broke that window?)のように主格の疑問代名詞で始まる疑問文のことである。また、doの使用は主として書き言葉の動詞倒置のケースにおいても義務的である: No sooner did he open the door than the strong wind blew in. 倒置しなくても文法操作が可能であるということは、もし倒置が行われたら、特別な意味になり、その機能が表示されていると解釈すればいい。

ここで否定文の語順に関して、Blake (2002: 210)は語順が柔軟であったShakespeareの例を用いて8種類にまとめている。具体例については原著を参照してほしいが、パタン化したものを(14)~(21)に示す。(16)は本論に直接かかわるので例も含めた。⇒は筆者のコメントを示す。

(14) S + Aux + <NEG> + V (+O) ⇒ 現代英語の標準形

(15) <NEG> + S + Aux + V (+O)

(16) Aux + <NEG> + (S) + V (+O) ⇒ beの否定命令文を含む

Did not I dance with you in Barbant once? (*Love's Labour's Lost* 2.1.114)

Do not be so bitter with me (Midsummer Night's Dream 3.2.307)

(17) V+<NEG>+ S / O

(18) (Aux +) S+ <NEG> + V ⇒現代英語では Don't you~ が普通で、Aux+<NEG>+S+V となる

Do you not hope your Children shall be Kings (*Macbeth* 1.3.116)

(19) <NEG>+V+O ⇒頻度の副詞 never の例なので not とは区別して考える

(20) V+S+<NEG>+C

(21) V+O+<NEG>

現代英語の否定文のパターンは、一般動詞の場合 do を使用するので、S+Aux+<NEG>+V(+O)、法助動詞と半助動詞の場合も同様に S+Aux+<NEG>+V(+O) である。Be 動詞を助動詞扱いすると S+Aux+<NEG> になる。英語が類型論的に VO 言語で主語が義務的であることを考慮し、(17) (20) (21) は除外すると、否定の基本パターンは初期近代英語も現代英語も Aux+<NEG>+V に収束する。法助動詞は命令文には使われないのでこのパターンの Aux には一般動詞であれ、be 動詞であれ、明確な助動詞を置くとすれば、迂言の do 以外使いがない。

be の否定命令文において do つまり don't が何ら抵抗なく使用されているということは、規範文法を超えた力を想像させる。be 動詞の命令文で、do が文頭に置かれた場合、一般動詞の場合と同様のとらえ方がなされ Don't になってしまったと推測するのはあまり無理がない。Don't~, Doesn't~, Can't~, Won't~, Haven't~, Isn't~, Aren't~ と並べてみると、be だけが原形と現在形が異なるという事情があるにせよ、\*Ben't はいかにも不自然である。

なお、キルヒナー (1983: 448) にはやや特殊な用法かもしれないが、to become の意味で使用されている be の否定疑問文において do がよく用いられるとの指摘がある。become は一般動詞であるから do による文法操作が必要である。それがそのまま be にスライドした感がある。(22) に同書の例文を示す。a, b では何の抵抗感もなく don't が使われている様子がうかがわれる。

(22) a. why don't you be my partners?

b. why don't you be my lawyer?

要は、文法学者や教師でなければ、be 動詞の否定命令文にも don't を用いるということにはさほど抵抗がないようだが、これまで問題にされなかった「become の用法との混同」という可能性も否定できない。なにしろ be- の部分が共通であるから誤りやすい。

Be not... や Not be... の形式は理由があって避けられたということだ。口調の悪さも気になる。ここで方言や変異種の話を持ち出すのは不適切かもしれないが、

多様な英語を見ているといくつかの法則が見いだされる、それは、「横並び」を作り出そうとする力、単純化もしくは逆の細分化を作り出す力が働くということである。Sweet (1971: 87-88) はその点を重視し、shallとの対照表を作成した。「横並び」の問題は意外に大きい影響があるかもしれない。とすれば、「Don't+原形」という形式・構文の圧力という考え方も出てくる。<sup>(6)</sup> 文法学者でなければ、don'tが法助動詞以外の否定のマーカールと一元的に考えて動詞の種類にこだわらずに使用する傾向が出て不思議はない。そこにバタフライ効果が働けば、意外に速く広がることもありうる。

## 結語

doは共起する動詞のカテゴリーにかかわらず、文法操作詞として肯定・否定・疑問・平叙・命令のすべてに使用できる潜在能力を持っており、事実すべての用例が数の多寡は別として見出される。廃用になったタイプもあり、おそらく「一つ」の否定パターンへの簡素化の流れと「使い勝手の良さ」によって特定の表現法が生き残ったと思われる。現代英語文法の不可解な部分の多くは複線的で不均衡な歴史的発達の結果であるが、偶然のように見える変化の根底には、人間の脳と言語社会の変化による必然性が作用している。

be動詞の否定命令文においてdoが使用されている謎を探る試みは、英語の歴史的展開の纏れた糸を一つ一つ解きほぐす作業である。ベースにあるのは、英語を使用していた人たちが、単純なパラダイムを求め、複雑な操作と曖昧さを回避したいと本能的に感じていたことにある。これこそ冒頭で触れたいいくつかの言語（変化）現象を生み出す「ドリフト」の原動力であろうと思われる。ドリフトの考えによれば、言語は一定の方向に向かって変化していき、可逆性はない。意味の一般性と無色性に特徴のあるdoを文法化によって助動詞に変え、主語と動詞の倒置の煩雑さを避け、主語と目的語の混同を回避し、動詞と文法操作詞を隣接させてシステム稼働の単純化を可能にし、そして最小のエネルギーで最大の効果を上げているのが、英語の場合、doの使用である。

光の存在が目に見えるのは、遮蔽物があって陰影ができたときである。文法も同じようなもので、普段は目に見えない。遮蔽物や障害物があると目に見えてくる。奇妙な語法や一見不適格に見える語法がその役目を担っているといったら言い過ぎであろうか。迷宮を照らす光は意外なところにある。

## 註

- (1) 英語の綴り字と発音の対応関係のあまりの無秩序に、かつて劇作家のGeorge Bernard Shawは仮想単語の'ghoti'は[fiʃ]と発音できると語ったとされている。laughの[f], womenの[i], nationの[j]をつなげるとそうなる。ただし、gh-が語頭に来る場合には、必ず[g]の

発音になるので、遊び半分の冗談である。

- (2) 一夫多妻制の文化で「妻は一人だ」の意味、つまりこの a が明確な one の解釈、その他特々なコンテクストについては、ここでは除外して考える。
- (3) 'royal we' とか 'plural of majesty' といわれる用法である。しかしながら、不思議なことに、再帰形は *ourselves* が原則である。
- (4) なぜ君主が自らを複数形で呼ぶようになったかについては、ローマ帝国が東西に分裂し、皇帝が二人同時に存在したと結びつける説があるが、真偽のほどは定かではない。
- (5) \* は、ここでは通常の非文法性・不適格性ではなく、文献上確認できない再構築形を意味する。
- (6) It's me. における目的格の使用の説明に、動詞のあとの「位置の圧力」という概念を使用することがある。

### 参考文献

- Alexander, L.G. 1988. *Longman English Grammar*. London: Longman.
- 荒木一雄、水鳥喜喬、米倉緯. 1997. 『中英語の初歩』 東京：英潮社.
- 荒木一雄、宇賀治正明. 1984. 『英語史 IIIA』 東京：大修館書店.
- 安藤貞雄. 2007. 『英文法を探る』 東京：開拓社.
- Blake, N. F. 2002. *A Grammar of Shakespeare's Language*. New York: Palgrave.
- ブルンナー、カール. (Tr. 松浪有他). 1973. 『英語発達史』 東京：大修館書店.
- Fisher, Olga. 1992. "Syntax." In Norman Blake (ed.) *The Cambridge History of the English Language. Vol. II 1066-1476*. Cambridge: Cambridge Univ. Press, pp.207-408.
- Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hudson, Richard. 1996. "The rise of auxiliary DO: verb-non-raising or category-strengthening?" (Online)
- Jespersen, Otto. 1940. *Modern English Grammar on Historical Principles*. V. London: George Allen & Unwin.
- . 1970 (=1917). "Negation in English and Other Languages." In *Selected Writings of Otto Jespersen*. London: George Allen & Unwin, Tokyo: Senjo Publishing, pp. 3-151.
- Katz, Josh. 2016. *Speaking American: \*How Y'all, Youse, and You Guys Talk, A Visual Guide*. Boston-New York: Houghton Mifflin Harcourt.
- カチュール、ヤムナ と ラリー・スミス. (井上逸平他訳). 2013. 『世界の英語と社会言語学』 東京：慶應義塾大学出版会.
- キルヒナー、G. 1983. 『アメリカ語法事典』 東京：大修館書店.
- Larsen-Freeman, Diane and Marianne Celce-Murcia. 2016. *The Grammar Book: Form, Meaning, and Use for English Teachers*. (3<sup>rd</sup>. ed.) Boston: National Geographic Learning.
- Mustanoja, Tauno F. 2016. *A Middle English Syntax*. Amsterdam-Philadelphia: John Benjamins.
- Nevalainen, Teruttu. 2012. "Mapping Change in Tudor English." In Lynda Mugglestone (ed.) *The Oxford History of English*. Oxford: Oxford Univ. Press, pp. 219-261.
- 小野茂. 1960. 「アルヴァル・エレゴール著『助動詞 Do』」一橋論叢 43(5): 575-582.
- Sapir, Edward. 1921. *Language*. New York: Harcourt.
- Sweet, Henry. 1971 (=1898). *New English Grammar Part II*. Oxford: At the University Press.
- 高橋英光. 2017. 『英語の命令文：神話と現実』 東京：くろしお出版.
- 寺澤芳雄、川崎潔(編). 1993. 『英語史総合年表』 東京：研究社.
- Trudgill, Peter. 1999. *The Dialects of England*. (2<sup>nd</sup>. Ed.) London: Blackwell.

- Trudgill, Peter and Jean Hannah. 1994. *International English*. (3<sup>rd</sup>. Ed.) London: Edward Arnold.
- 宇賀治正明. 2000. 『英語史』 東京：開拓社.
- Upton, Clive and J.D.A. Widdowson. 1999. *An Atlas of English Dialects*. Oxford: Oxford Univ. Press.